発行日　昭和58年12月20日発行（毎月20日発行）通巻33号
昭和57年８月16日第三種郵便物認可

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—試行錯誤—

No.33

御所日本語学校の平賀先生とベトナム人生徒たち

御所日本語学校の半年間

——一時滞在施設から日本社会へ——

ボートピープルとして日本へ上陸したベトナム難民は，定住先のメドのつかないまま各地の施設に長期間滞在する人数が増えている。定住促進センターの収容人数も限られているところから，ＪＶＣはカリタス・ジャパンと協力し，奈良県御所市のキャンプで半年間の日本語学校を開設した。　（編集部）

今年２月に開校した奈良・御所日本語学校の第２期は，５月９日に開校し，予定の12週間の学習を無事終えて，７月30日修了式を行なった。今回の修了生は31名（家族を含めると36名）で，各家族ごとに全員が日本語で感謝の辞を述べ，書道，手芸クラブの作品展示も行なった。なお，ＪＶＣが計画した日本語コースは１期，２期３ケ月ずつ２回，つまり６ケ月であるため，７月30日をもって閉校になった。

12週間の主な指導内容は，「にほんご」（ＪＶＣ発行）「日本語入門」（難民事業本部発行）の２冊のテキストを中心にして，語彙700語，漢字の読み書き76字（日本の小学校１年次で学習するもの），漢字の読み方265字（テキストに出てくるもの及び日常生活に必要と思われるもの）である。こういった語彙・漢字を使って，日記，手紙，作文及び簡単なスピーチ等が出来るようになり，修了式の１週間前

Trial & Error No.33号 目次

スリランカ報告……３ｐ
ＪＶＣ総会の報告より……６ｐ
声　総会から……８ｐ

には，奈良市立一条高校のご厚意で全員が奈良市に招待され，家族のあるものはホームステイを，単身者は薬師寺に宿泊し，日本の生活の１日を体験することができた。

日本語学校の授業を開始するにあたって，クラス編成のための日本語能力調査を行ったが，１期２期生とも過半数は読み書きも会話も出来なかった。

12週間のプログラムで１日の授業時間は５時間，それに毎日１人２時間の個人学習を義務づけたので，合計１人１日少なくとも７時間の日本語学習をしたことになる。そのほか週１時間各希望のクラブ活動週２時間必須のクラブ活動を実施した。

１期生は子供のある若夫婦が多かった。夫婦とも20代で熱心に勉強したが，妻の方は子供に手がかかることもあって，授業が難しくなるにつれて欠席がちになることが多かった。男性の方も後半の授業についていくのは大変そうだったが，大半はベトナムでの学習年数が少ないにもかかわらず，最後まで一生懸命勉強した。

２期生は９割が単身者で全体の８割が男性だった。すでにひらがな・カタカナは自分で学習していたものもあったが，女子は全く読み書きが出来ず，しだいに能力差が目立ってきたため，特別クラスを設けるなどして生徒の能力にあった方法で指導するよう心がけた。

全体的に，男性は皆積極的で互いに助け合いながらよく勉強したが，20才前後の若者なので学習指導とともに生活指導も必要とされた。

１期は非常勤講師が３名，２期は２人いたが，１期２期とも専任講師は２人で，１日５時間の授業のほか夜２時間の個人学習時間を交代で巡回して，当日の復習の個別指導を行ない，また生活指導にもあたった。住居と学校が同じ敷地内にある利点を利用して，日常気づいた点をその都度指導した。アシスタントは事務のほか，この生活指導を担当した。

この12週間で，日本語の基礎能力は習得できたはずである。習得した学習を基にして，いかに発展させていくかがこれからの課題である。

第１期修了生で第２期生とともに学習していたものは，７月23日に授業を終了した。第１期，２期生とも，日本の言語・文化・習慣に関する基礎を身につけ，これから本格的に求職活動をはじめて，定住への第一歩を踏み出すわけである。

（御所日本語学校 報告書より抜粋）

おひなさまを囲んで

平賀増美先生にインタビュー

A―御所日本語学校の一日を教えていただけますか

Q―朝８時ごろから，事務所でその日の教材やテープ，ＯＨＰなどの道具を用意します。生徒の間で週番が決まっていて，毎朝提出する日記や書きとりのノートが出ているかチェックします。

８時45分からホームルームです。あてる人を決めておいて，日本語だけで質問をするんです。「何時に起きました。」「何を食べました。」 前の日に習ったことを応用します。

９時から12時までの授業では，間に10分休みが入るだけです。集中して授業していますから，ときには昼近くになると私がくたびれてしまって，区切りがついたところで早めにやめようとすると，授業態度がよくなくて私が怒っているのかと思って，生徒たちが，“まだ３分あります。やります”なんて言ってくるんです。

昼は食堂でいっしょに食事をします。そして１時から３時まで午後の授業です。その後クラブ活動を見てまわります。４時から，遅れている人などに個人指導をして，６時10分からの夕食の後，７時から９時まで各部屋をまわって指導してゆきます。時には話し込んで，10時ごろになることもあります。

それから事務所にもどって，整理をしたり，施設の神父さんと打ち合わせをして宿舎に帰ります。

その他土曜日には，日本の生活についてのオリエンテーションをしますし，生徒を連れて見学に出かけることもあります。日曜日には外からの見学者の案内などで忙しく，休めるのは月１日程度でした。

Q―半年間ほんとうにごくろうさまでした。どのようなことを心がけてこられたのですか。

A―たいへんでしたけど，みんなよくやりました。生活面では，物事のけじめとか，勉強するための土台となる態度習慣を身につけさせるようにしました。食事の後は当番が食器を洗うのですけど，洗った食

器を伏せておくとか，ふきんを消毒して干すとか，身の回りをきれいに掃除するとか，脱いだはきものをそろえる，とかいったことが，特に若い人たちには身についていないので，そうした訓練を心がけました。また，みんなは町の人たちをはじめ，いろいろな人のお世話になっているわけです。一生懸命勉強することがお返しでもありますけど，感謝の気持ちを態度で示すとしたら何ができるか，みんなで話し合うことを提案しました。そして駅から施設までの道路のお掃除をすることになりました。土曜の朝からみんなで道ばたのゴミをひろい，草とりをしました。そうしたら午後には町の人からコーラとアイスクリームがいっぱい届けられたのです。それからは町の人たちの見方も変わってきたようです。

とにかく教える方も，生徒たちも両方が燃焼しきったという感じの半年間でした。

スリランカからの報告

「7月25日，以前からこの島の北部で問題になっていたシンハリ人とタミール人の対立は，ついに首都コロンボに飛び火して，スリランカ全土を暴動にまき込んだ。昼頃，事件を知らされて家庭教師の先生宅から帰る途中，コロンボに続くバス通りから，もうもうと煙の立つのが見えた。タミール人経営の店のトラックが燃やされている煙だった。サリーのすそを苛立たしげにひらめかせて，学校に子供を迎えに走る母親達で狭い道はごった返し，我が下宿屋のおばさんは，家の門の前で料理用のスプーンをもったまま，私の帰るのを待っていてくれた。彼女は下宿人の無事を見届けた後で，学校に通っているお手伝いのチューティーを迎えに，慌しく出ていった。急いでつけたラジオから午後二時頃，全地域にわたる戒厳令がしかれた事が報告され，奇妙な興奮した空気も又，全土にひろまった。どこからかドーンドーンという低い爆発音が続いている夜，なかなか寝つくことができなかった。

コロンボ大学でマーケティングを教えている私の下宿の主人セーナラトナ氏は熱心な仏教徒だが，この暴動がきっかけで，彼とは何度も言い争いをしてしまった。『タミール人を憎むのはシンハリ人として当然の事である。この小さな国は我々のものであり，仏教徒のものである。タミール人はもとはと言えば，インド南部タミールナードの人間だ。インド人にはインドというあの広い国があるではないか。何故，この小さな貧しい国に来て，もうけるだけもうけて，我々の利益をかすめとっていくのだ』という意見は，大半のシンハリ人のタミール人に対する意見と言って良い。そして，シンハリ人の南方上座仏教と，タミール人のヒンドゥー教という互いに相入れない宗教観も又，対立の大きな原因の1つだった。

シンハリ人の多かった私の家の回りでは，タミール人の男が家から引きずり出され，ココナッツの木に縛りつけられて，殴られたり，物を投げつけられたりして，目や口から血を流していることもあった。刑務所では囚人の間でタミール人がリンチにされて殺され，翌日には，その報復戦が別の刑務所で行われたこともあった。」

今年4月からスリランカのコロンボに留学中だった三橋玲子さんは，暴動の時期に居合せたことから，その緊迫した様子を興奮さめやらぬ手紙で伝えてくれた。

彼女は大学の授業に備えて言葉を学んでいたが，暴動の直後から難民キャンプで物資の配給などの，ボランティアとして働いていた。暴動のため大学が閉鎖されたこともあり，過労がたたって健康を害した三橋さんは10月11日に帰国した。

焼き打ちにあったタミール人の商店（コロンボ市内）

背　景

スリランカを構成する二民族，多数派のシンハリ人（1,100万人）と少数派タミール人（270万人）の抗争の歴史は古い。

英国の植民地時代，タミール人は中間支配者として優遇され，金融・経済界を抑えていたが，1948年の独立に伴い，シンハリ人中心の国家制度になり，これがタミール人の分離独立運動を生んだ。徹底したタミール人締めつけ策をとった前政権とは一転して，現政権は融和政策を進めたが，その一方でタミール人過激派を厳しく取り締まった。また，タミール人が最近とくに反感を強めた理由としては，現政権の一連の経済政策がタミール人に不利益に働いた点があげられよう。

今回の暴動は，北部ジャフナ地区でシンハリ人陸軍兵士13人が，タミール人テロリストに襲撃されたことに端を発し，政府発表でも，約300人が死亡，約８万人が家や店を焼かれて避難を余儀なくされた。

ＪＶＣ東京事務所では８月初め，三橋さんに託すべく独自に募金を始め８月12日には三橋さんと電話連絡をとり，９月１日に集まったお金144,000円をスリランカの銀行口座へ振り込んだ。

ＪＶＣバンコク事務所では三橋さんからの報告を受けて，ＪＶＣとして救援活動を行なえるかの可能性を調べる意味で，釘村千枝子ボランティア（看護婦，当時クロントイ・スラムで活動中）を９月７～21日の２週間スリランカに派遣した。

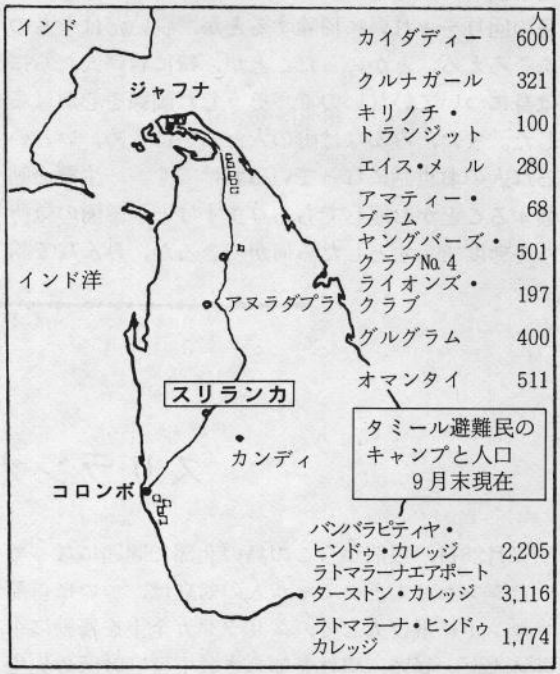
釘村ボランティアの調査報告書より

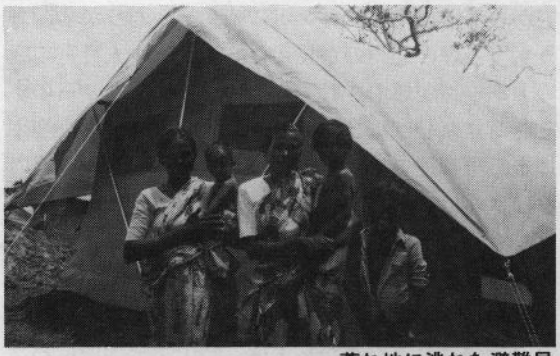
「避難民は，どの人も生活基盤を確立できず，人の世話に頼っている。最も必要なのは，彼らが自分の生活を自力で築こうとすることである。キャンプ生活があまり長びけば，その意欲をなくしてしまう恐れもある。荒野のキャンプの場合など，早く順応して自給自足を促すことだ。そのために外国の組織は必要な緊急援助を行ってすぐに引き上げるやり方がいいように思われる。現地ではすでに緊急段階は過ぎていることを確認したが，『現場を見なければ何も見えない』というのが実感だ。新聞やテレビや人の話で現場を推測するのは難しい。

とにかく，緊急援助資金の確保を急ぐことが必要である。被災者への援助金はもちろんだが，援助の必要性や可能性，方法を調査するための資金も含まれねばならない。募金を待っていたのでは，緊急援助に対処できないのである。」

ＪＶＣとしては，人員・資金の都合等諸般の事情を考慮し，当面スリランカでのプロジェクトは行わない方針を決めた。

タミール人避難民のキャンプと人口　９月末現在





荒れ地に逃れた避難民

一方，三橋さんは手紙で，スリランカ赤十字の病院で眼科の検査器具等が不足しているという話を伝えていた。これを知った百村清医師（鳥取市在住）が，自己資金を集めてこれらの機材を購入，この12月中旬には，自ら機材を届けるために三橋さんとスリランカへ渡ることになった。

ＪＶＣに寄せられたスリランカへの義援金の使途は三橋さんに委託した。９月に送金した分は三橋さんの帰国間際に彼女の手に届いたため，まだ使われておらず，三橋さんは今回スリランカへ行ってこれらの義援金を，サルボダヤ（スリランカの民間団体）が運営する難民キャンプおよびスリランカ政府難民局へ届ける予定。

JVCプロジェクト

1983年11月30日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カオイダン（カンボジア難民キャンプ）	**技術学校** 自転車，牛車，モーターバイク，自動車，発電機の整備技術を習得する。各3ケ月，学生数約120名，	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協議会	嶋　紀晶※，松本 一仁 トンディ，ソムエック
タイ・カンボジア国境	**レントゲン移動診療プロジェクト** 移動レントゲン車による，難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。	日本青年会議所関東地区，医療部会 西本願寺 W.F.P./UNBRO	金子　一弘※， 武田　長久，林　達夫 スラ・プロチョン サルミエント・ロドリゴ
	ナムユン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の妊産婦，乳幼児を対象とした補助食供給（12月よりノンチャン難民村へチーム移動の予定）	W.F.P./UNBRO	大野　直樹※，イサラサック トンチャイ，プライサモン 近藤美佐子
タイ農村	**給水プロジェクト** 東北タイ農村での井戸掘り，貯水タンクづくり	モラロジー国際救援運動推進委（MIRC）	木村　信夫※，スラポン 佐藤正喜
タケオ（カンボジア国内）	**井戸掘り** 地域の診療所での井戸掘り	OXFAM モラロジーMIRC	簑田　健一（待機中）
パナニコム（第三国定住待ちの難民の一時収容施設）	**日本語学校** 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション	天理教千葉 千葉県	佐藤　和美※，ティアン 鈴木絵理子，石丸　寧 森本　陽子
クロントイ・スラム（バンコク市内のスラム）	**電気工養成所**　スラム住民のための職業訓練 **電気工研修所**　養成所終了者による電気修理 **奨学金援助**　スラム児童のための学費援助 **図書館**　子供たち，大人のための図書館	モラロジーMIRC 神奈川県国際交流協会 一般寄付	福村　州馬， イム，サムルアイ アルニー，坂場由美子 タウイチャイ，伊藤真理子
ソマリア（東アフリカ）	**農業プロジェクト** マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	UNHCR 一般寄付	柴田　久史，アリヤラトネ 税田　芳三 山賀　望幸
レバノン（中近東）	**医療ボランティア派遣プロジェクトおよび緊急物資援助** レバノンでの被災民（レバノン人とパレスチナ人）に対する医療活動の援助および物資救援。	一般寄付	竹内　俊之
日本国内	**日本語家庭教師**　定住難民の日本語学習援助 **バザー** **ハンディクラフト販売**	善倫寺 小山工業所 一般寄付	槌田　博　他約30名 東　田鶴子　他約20名
東京事務所（本部）	渉外，資金調達，ボランティア調整， 会計，総務，情報収集および広報，T/E発行，等	全社協 YMCA 妙心寺 一般寄付	岩崎　駿介（代表）， 星野　昌子（事務局長）， 熊岡　路矢，田島　誠， 荻野美智子，本橋　栄， 鴇田　三芳，佐々木志保 他約20名
バンコク事務所	渉外，資金調達，ボランティア調整， 会計，総務，情報収集および広報，バザー等		高塚政生（バンコク事務所長） 深津　高子，山西　映子 ポンピモン，カモン 森本喜久男，小池　清治， 勝俣　江美　他約10名
京都連絡事務所	11月30日付で事務所閉鎖	支持会費 バザー売上	永井　聖子（京都事務局長） 他数名

JVC総会での報告より

JVC 総会会場風景

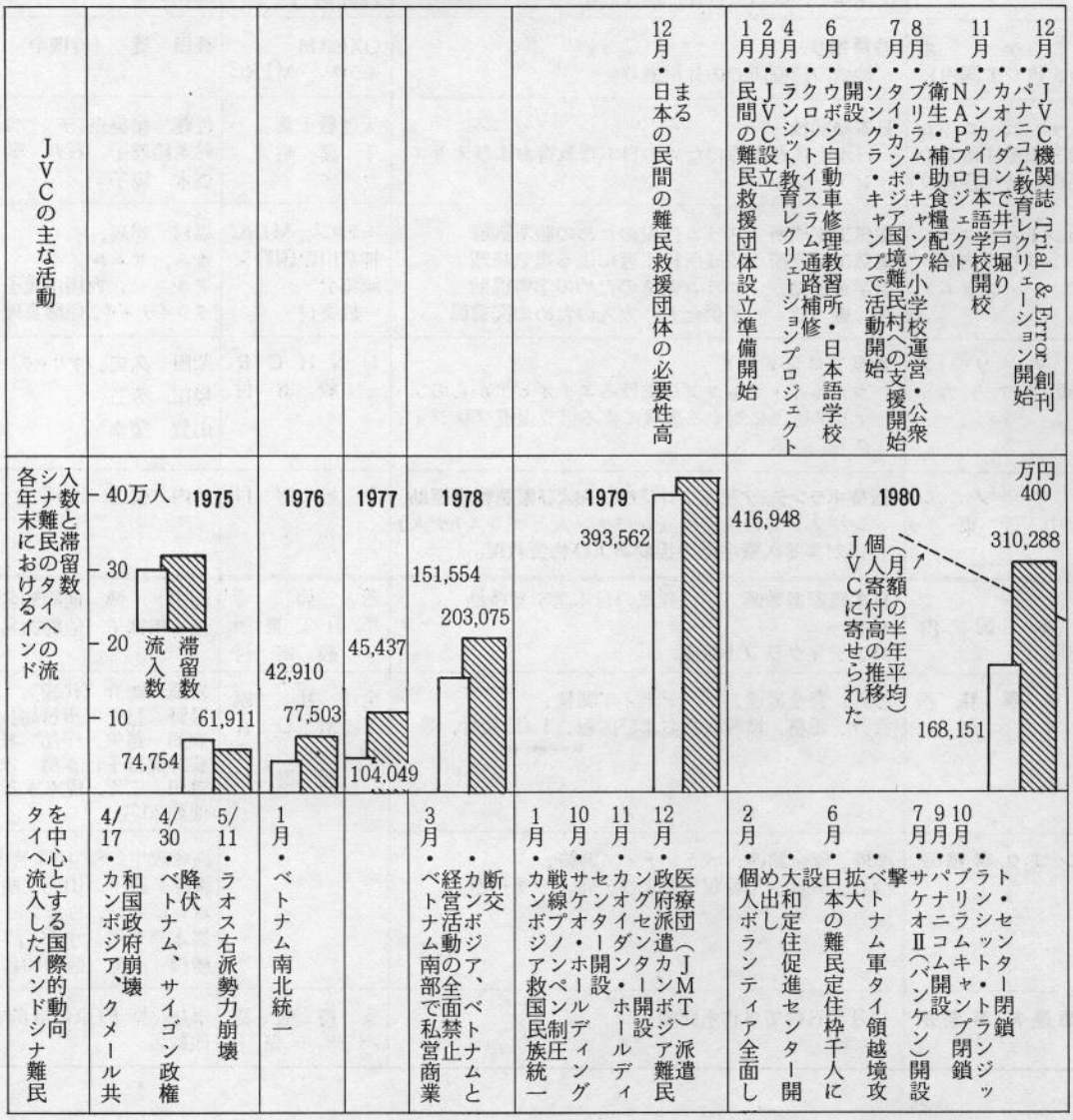
今年度の基本活動方針としては，①難民救援・復興活動を主とし，②開発援助活動を従とし，窮状にある人々の自立を助ける事業を展開する。

〔活動地域および活動事業内容〕

1. タイにおけるインドシナ難民救援活動および開発援助活動

① タイ・カンボジア国境，カンボジア難民村およびタイ被災村でのレントゲン移動診療。（民間の緊急医療団の編成という長期的目標を設定しつつ進める）

② パナニコム，日本語学校，日本定住予定者のための日本語教育およびオリエンテーション



③　カオイダン，西崎憲司記念技術学校，カンボジア難民のための技能訓練

④　カオイダン，サイト・メンテナンス（キャンプ設備の維持管理）

⑤　ナムユン難民村，妊産婦・乳幼児・栄養失調児等への補助栄養食供給 —— 受益者が集まらない等の理由により，12月末で終了。（総会の後，WFP/UNBROから，ノンチャン難民村での補助食供給を行うかどうか打信があり，これを受けてとりあえず83年いっぱい実施することになった。

⑥　給水プロジェクト，タイ・カンボジア国境沿いのタイ農村での浅井戸堀りによる水の確保

⑦　クロントイ・スラム，バンコクのスラム住民の貧困の解決への協力（電気工養成所・研修所，図書館，奨学金等）

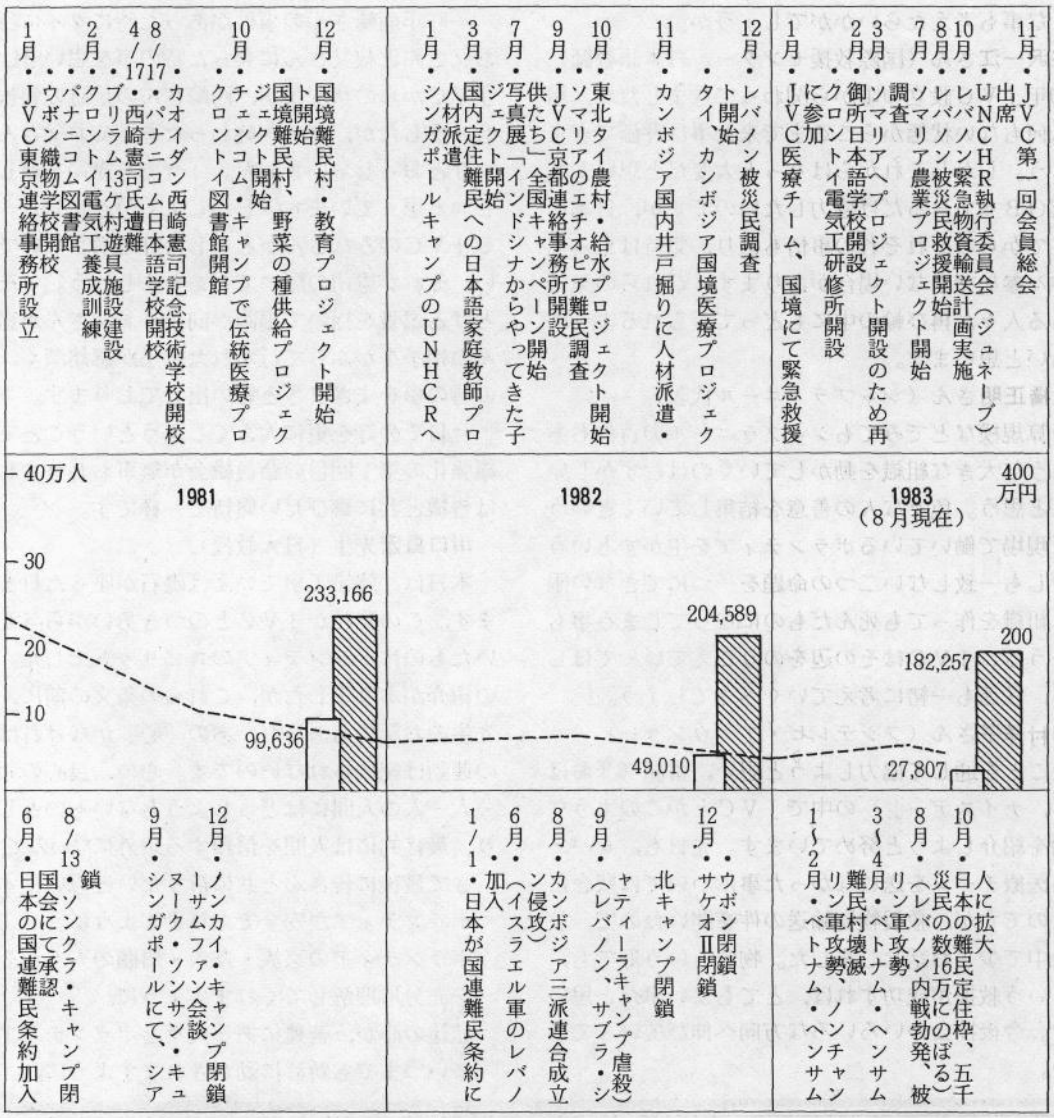
2. カンボジアにおける復興救援活動　給水，機械修理および技能訓練（OXFAM　LWSへの出向）

3. ソマリアにおけるエチオピア難民に対する定住促進援助活動　農業による自立促進

4. レバノンにおける戦乱による被災者に対する救援活動　物資援助および状況によって医療スタッフの派遣

5. 日本国内における定住インドシナ難民に対する日本語家庭教師活動

6. 日本国内におけるバザー，映画会，講演会，スタディーツアー等の活動



声

11月5日ＪＶＣは千駄ケ谷区民会館において，はじめての会員総会をもち，活動の充実と組織的確立の新しい段階にはいることになりました。全ての議事終了後，次の方々からの御意見・感想を頂きましたので，ここに紹介させて頂きます。

斉藤ヒデさん（乳児保育園経営）

数年前カンボジア難民の慰問にでかけ，星野事務局長に会いました。実に大変なしごとと思い，「職員の保償は？」とお聞きしました。今日この規約に目を通しながら，ここまで辿りついた事に対して，ご苦労様でした，と言いたい気持です。直接活動に参加できませんが，会員を集めたりする事で協力したいと思います。地区の組織をつくり拡げるというような事も考えたらいかがでしょうか。

谷沢一江さん（国際救援センター，日本語教師）

80年ＪＶＣ設立の頃から関わってきましたが，組織も何もない状態からここまで来た事は評価できましょう。しかしこれからはもっと大変だと思います。私達ＯＢもできるだけ協力したいのですが，日本に帰ってからのそれぞれの事情もあり，気持はあっても中々参加できない場合があります。これらの気持のある人々が再び輪の中にもどってこられるようにしたいと思います。

大橋正明さん（シャプラ・ニール代表）

予算規模などでみてもシャプラニールの百倍もあるような大きな組織を動かしていくのはむずかしい事だと思う。色々な人の善意を結集していくという事と現場で働いているボランティアを生かすという必ずしも一致しない二つの命題を一つにできない限り，組織を作っても死んだものになってしまう事もありうる。ＪＶＣはその辺をのりこえていってほしいし，私達も一緒に考えていくべきでしょう。

中村洋子さん（フジテレビ・アナウンサー）

しごとを通して協力しようと思い，番組（「おはよう，ナイスデー」）の中でＪＶＣとかこのような活動を紹介しようと努めています。先日も，レバノンへ医療チームを送れなかった事については残念だったのですが，救援物資輸送の件を聞いたので，放送の中で少しお話ししました。物資という形でも，こういう救援が成功すれば，とてもよい事だと思います。今後社会のいろいろな方向へ伸びていってほしい。

多田正毅医師（城西病院院長）

82年11月からＪＶＣの現場活動に約２カ月たずさわり，組織強化の必要性を痛感しました。今日見るような形にまでなれたことで，私自身も非常によろこんでいます。この組織を十分に生かして，もっと一般の人も多く参加できるようなボランティア組織になってほしい。

見坊和雄さん（全社協理事）

一昨年西崎さんの事件があった時にタイに行き，お父さんと叔父さんに会った時の事を思い出します。ＪＶＣからの状況説明，西崎さんの足跡の報告に立会いましたが，全てが終わったあとでお父さんはポツリとおっしゃいました。「今でも憲司を返してほしいと思っています。しかしよく分りました。どうぞＪＶＣのみなさんがともした灯を消さないで下さい。それが憲司の願いでもありましょう。」そのことばと遺骨を抱いて福岡へ向かうお父さんが憲司さんの帽子をかぶって行かれた様子が感銘深く，今その時の事をまざまざと思い出しております。

今日その灯を更に大きくしようということで，組織強化の第１回目の会員総会が無事おわりました事は皆様と共に喜びたい気持で一杯です。

川口昌宏先生（日大教授）

本日は，建築工事でいえば礎石が座った日といえます。この間私がＪＶＣとのつきあいから与えて頂いたものはボランティアのスピリットでした。規約の紹介がありましたが，これらの条文の前に，栗野先生のお話にもあった，あの「心」がなければ，この運動は続けられないのです。心の，良心の領域は一人一人の人間にはどうしようもないものとしてあり，最終的には人間を信頼する以外にないのですが。

さて最後に皆さんと共に祈りたいと思います。

- ボランティアが安全でありますように。
- ボランティアの家族・友人・周囲の人々がその心を充分に理解してくれますように。
- 私達の心が，苦難にある人々とボランティアの心にいつまでも新鮮に動かされますように。

「国際ボランティア」について

栗野　鳳

—総会講演より—

ＪＶＣの正式名称は，このたび「日本国際ボランティアセンター」ということになりました。

「国際ボランティア」というコトバは，日本語としてまだ定着していないようにも感じられますが，それも無理からぬことで，そうした実体が豊かになって行かないことには，コトバの方も安定しないでしょう。ともあれ，この「国際ボランティア」ということについて，私が考えているところをお話しましょう。

最近，レバノンやシリアで竹内俊之ボランティアが接触してきたVOLAGS（民間団体）の一つに「テル・デ・ゾム」と呼ばれる団体があります。この「テル」は，土地，大地，地球を意味し，「ゾム（オム）」は，人間のことです。従って「テル・デ・ゾム」は「人間の土地（大地）」という意味になります。

私は６，７年前，そのシリア本部というものにかかわりを持ったことがあります。その詳しい経緯は省略しますが，そのシリア本部で出していたパンフレットには次のような言葉が書かれていました。

「われわれの動機は，生きている人間の，他の人間に対する感応である。人間が他の人間を，また人間のグループが他のグループを，偏見や国籍や人種や宗教の障壁を乗り越え，求めることである。人類は一つである。すべての苦難が義務と行動とを呼びかけている——」

さらに分ったことは，この団体は，スイス，フランス，ドイツに設立され，ベトナム戦争の最中にはサイゴンなどにも援助の手をさし伸べ，その後，レバノン，ヨルダン，シリアにそれぞれ「本部」を設立するに至った，ということ，さらに，「人間の土地」という名称には次のような背景があるということでした。

「星の王子さま」の著者として日本でも有名なフランスの作家——飛行家で1944年７月地中海方面に偵察飛行に出て帰還しなかった——アントワーヌ・ドゥ・サン・テグジュペリの作品の中に「人間の大地」と題するものがあります（サン・テグジュペリ著作集１「南方郵便機・人間の大地」みすず書房1983年）。

この作品の中に，僚友ギョメの話が出てきて，サン・テグジュペリは次のように書いています。

「……彼の偉大さは，おのれを責任あるものとして感じるところにある……。

人間であるということは，まさに責任をもつことだ。おのれにかかわりないと思われていたある悲惨さを前にして，恥を知るということだ……。

（死を軽んずる行為について）もし，みずから引き受けた責任というものに根ざしていないなら，その人間は，心の貧しさか，若気のいたりの現われでしかない……」

「テル・デ・ゾム」という名称が，サン・テグジュペリの同名の作品から来ている。すなわち，そこに描かれた精神・志を同じくする人達が，この団体を創設した，と知ったとき，私は驚きました。こういう人達がいたのか，こういう団体があったのか。

私は，青年の頃から西欧精神，特にヒューマニズムに関心を持ってきましたから，サン・テグジュペリの作品に現われているような精神に同感する人が多いことについては，意外ではなかったのですが，それを実践に移している人達が，しかも中東の国々にもいると知って，腹の底から揺り動かされるような感動を覚えました。

サン・テグジュペリの前述の作品が書かれたのは1939年です。そしてそれより少し前，1931年に宮沢賢治があの有名な詩「雨ニモマケズ」を書いています。〔11月３日（雨ニモマケズ）宮沢賢治（1896～1933）「手帳より」昭和６年（1931）〕

雨ニモマケズ　風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
欲ハナク　決シテイカラズ
イツモシヅカニワラッテヰル・・・・　以下略

（次頁へ）

宮澤賢治の詩「雨ニモマケズ」は1931年，彼が40才にも満たない若さで亡くなった，その2年程前，病床で色々な感想や詩を書きつけていた手帳に記されていた詩です。この中には，病気のために思うようにならない自分の肉体的な条件を超越したいと願う気持から，人間の生き方について相当理想化された点も含まれているように感じられます。普通の人々，大勢の人間には，到底やれそうにもない理想像，理想的な人間像であって，裏から言えば，およそ出来ないことが列挙されているだけだ，そして，そんな人間は，この世の中に実在している筈がない，と多くの人々が考えていることでしょう。

しかし，賢治のこの詩を想い出させるような日本のボランティアに，私は現に遭遇しているのです。1981年春，不慮の事故のために亡くなった西崎憲司さんは，「ケンジ」という名前からの連想だけでなく，そのタイでの生き方が，この詩の人間像を思い出させてくれました。そして，西崎さんだけでなくその他にも，同じ人間像を多少とも体現しているようなボランティア達に私は会いました。

西崎さんが亡くなった報らせを聞いた晩，私は一篇の詩のようなものを書きました。（ＪＶＣ機関誌ＴＥ同年５号（西崎さん追悼）に掲載されています。）

「日本に老いた両親を置き，そしてまた安穏な，きまりきった生活としきたりを去って，アジアの苦難な境遇にある人たちに，みずからの心を通わせ，相ともに生きようと，新しい日本の若者の生き方を身をもってあらわしてきた。その生命，日本の若者の愛と知と，明日の世界への志とを，一日一日タイの大地に刻みこんできた男――」

宮澤賢治の詩は「東ニ病気ノコドモアレバ　行ッテ看病シテヤリ　西ニツカレタ母アレバ　行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ　南ニ死ニサウナ人アレバ　行ッテコハガラナクテモイイトイヒ」と唱って，さらに「北ニケンクヮヤソショウガアレバ　ツマラナイカラヤメロトイヒ」とも言っています。私は，この「北」についての部分に非常に興味を感じます。そして「ケンクヮヤソショウ」を「ツマラナイカラヤメロ」と本当の説得力をもって言いうる人間があるとすれば，それは恐らく，東や西や南の人々のために賢治の詩にあるような行き方を実践してきている人間だけであるかも知れません。

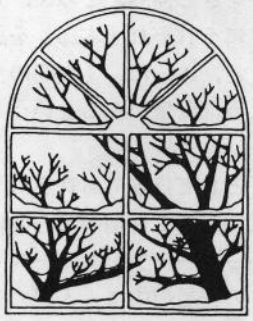
皆さんは既に御気付きであろうと思いますが，私は国際関係，このいわゆる「国際社会」の中での人間のあり方を考えながら，「雨ニモマケズ」の詩を読みつつあるわけです。しかし，私は，開発途上諸国にたいする援助や，技術協力や，人道的救援について，国家や国益の見地から，重要であるとか，望ましいとか，強調するために，この話をしているのではありません。そうした議論は別の方々が，別のところでなさるでしょう。従来も，そうした議論なら，幾らも聞かれました。

私が賢治のこの詩を読んで，一つ確信しうる点は，東西南北は記されていますが，境界，国境，国籍，人種などには全く言及されておらず，恐らく，賢治にはそういった意識がなかった，ということです。

３年前，インドシナ難民が日本に入国し始め，日本にとっての「難民元年」が始まった頃，「なぜ他国の人間を救援しなければならないのか？」といった疑問を持つ日本人も少なくなかったようですが，最近は少くとも公然とこうしたことを言う人は見当りません。しかし，難民救援のような国際的な人道的な事業において，日本が「先進」国と言いうる状態にはないことも事実です。

最後に皆さんに指摘しておきたいことが一つあります。前述の「国際ボランティア」の精神にかかわる原理を，われわれは日本国憲法の中に既に持っているということです。憲法前文第二項末段には「われらは，全世界の国民が，ひとしく恐怖と欠乏から免かれ，平和のうちに生存する権利を有することを確認する」とあります。ただ，残念なことに，われわれはこの原理の実践において，十分な国民的努力を尽くしてきたとは言えないのです。

（ＵＮＨＣＲ特別顧問）



1983年11月５日

ＪＶＣの活動は，みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため，以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

●インドシナ難民救援募金（10月小計　36,000円）

東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ，各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

●ボランティア募金　（10月小計　20,900円）

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

●クロントイ・スラム募金　（10月小計　3,000円）

バンコク，クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。

●デッグ・スラム奨学金　（スラム児童奨学金）

バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助，一口いくらでも可。　307,000円）

●JVC運営経費募金

事務経費，人件費，通信費等，JVCの仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。　（10月小計　1,000円）

●アフリカ難民救援募金　（10月小計　34,920円）

●レバノン被災民救援募金（10月小計　126,000円）

レバノンでの被災者に対する医療活動および物資援助にあてられます。

●日本語家庭教師募金

定住難民の家庭は遠い所が多く，交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。

●医療募金

緊急医療活動のための資金となります。

郵便口座：東京７－96238
加入者名：ＪＶＣ東京事務所医療募金係

送金方法

住所，氏名，募金種目名を必ず明記の上，下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京9−27495
加入者名：JVC 東京事務所

※　会計の都合上，「Trial＆Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

編集後記

難民に限らず，虐げられ窮境にある数知れぬ人々，レバノンやスリランカから，世界各地から切実な事態が告げられても，われわれの力はごく限られたものでしかない。そして，海外へ出て行って一見派手に活動するよりも，難民など外国人の日本社会への受け入れ問題に取り組むほうが，緊要で難しいとも言える。

なすべきことはあまりも多い。賢治の詩にあるように〝オロオロアルキ〟まわるような一年であった。

●裏表紙撮影　釘村千夜子

子供たちに笑顔はもどったが――スリランカにて

「Trial ＆ Error」年間購読申し込み方法

一般購読者　1口　3,000円（1冊送付）
賛助購読者　1口　10,000円（4冊送付）
郵便口座番号　東京３－54186
加入者名　ＪＶＣ東京事務所
住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。

ＪＶＣより

●ＪＶＣ京都連絡事務所閉鎖のおしらせ

82年９月より開設されたＪＶＣ京都連絡事務所は誠に残念ながら，主に財政上の理由により，83年11月30日付をもって閉鎖される事になりました。これまで主に関西地区において京都連絡事務所に寄せられた，御支援，御協力に対して心から感謝すると共に，これからは東京事務所を通し，現地活動への支援あるいは連絡を頂けますようお願い申上げます。今後，関西地区のみならず各地域において徐々に連絡員網の充実を構想しておりますので，実施の際はよろしくご協力下さい。

●ＪＶＣ紹介

ボランティア活動希望者およびＪＶＣについて知りたいという方々のために，毎月の第１月曜日（１月のみ第２月曜日）午後６時～９時までオリエンテーションを行います。内容は①ＪＶＣの成立ち，②活動紹介（海外−国内スライド付），③世界の難民状況（あるいは貧困の問題），④ボランティア活動者として求められる資質と準備。場所はＪＶＣ東京事務所。担当は熊岡です。参加者は事前にご連絡を！

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第33号
発行日　昭和58年12月20日発行（毎月20日発行）通巻33号
昭和57年8月16日第三種郵便物認可

JVCとは

Japan International Volunteer Center は1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。

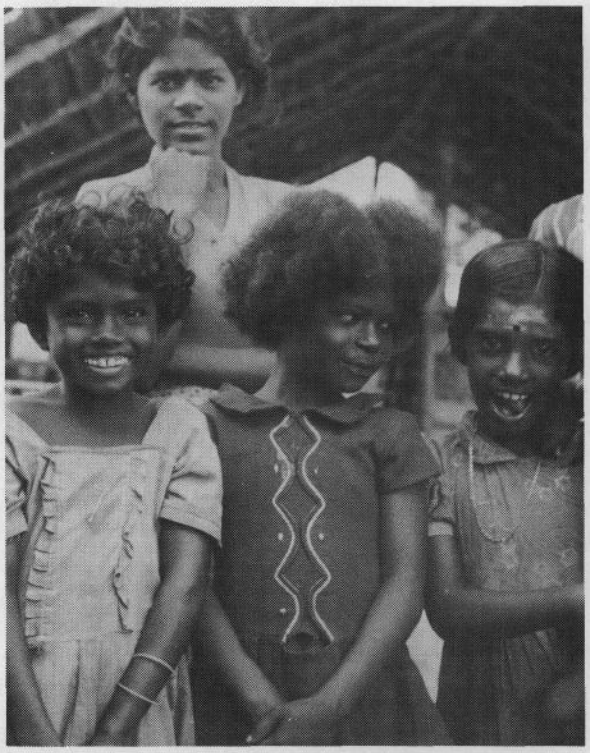
1979年の暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から救援に駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり，現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など，欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが，現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により，独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは，難民，そしてそれと同様の窮境にある人々に対し，できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが，タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや，バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず，カンボジア，ソマリア，レバノンで活動している他，日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は，こうした活動の情報，人材，資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発　行　所　日本国際ボランティアセンター
JVC東京事務所
〒166　東京都杉並区阿佐谷南
1-1-5　安田ビル3F
最寄駅　丸の内線新高円寺駅
TEL　03（316）3253

バンコク事務所　*Japan International Volunteer Center 67 South Sathorn Road Bangkok, Thailand TEL 286-4857*

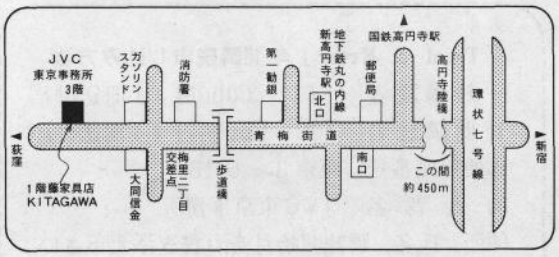
昭和58年12月20日発行
毎月20日発行
発　行　人　星野　昌子
編　集　人　本橋　栄

印　刷　所　㈱ベスト・プリンティング

『レバノン難民救援募金』緊急アピール

JVCでは，レバノン緊急事態に応え，これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため，**緊急アピール**を行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。**緊急アピール**に，一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。

英語・仏語の堪能な医師等も募集していますので，よろしくお願いします。



定価　送料共200円